
真・恋姫†無双 戯志才伝的なもの

帽子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 戯志才伝的なもの

【Nコード】

N3805X

【作者名】

帽子

【あらすじ】

この物語は何より働くことと儒学者が嫌いだと公言する、戯志才の物語である。

第一話 曹操に出会う（前書き）

恋姫・郭嘉の偽名で有名になりつつあるが、内容がさっぱりな戯志才を面白おかしく脚色したのがこの物語になります。

色々と突っ込みどころ満載になる予定ですのでご注意ください。

第一話 曹操に出会う

この物語は何より働くことと儒学者が嫌いだと公言する、戯志才ぎしやうの物語である。

洛陽。

後漢の首都であり、後漢最大の都。

洛陽の大学、その一室で本の山に囲まれながら本を書き写している青年がいる。

まずはこの青年は姓を戯 名を志才 という、字は色々あって無い。

「戯志才、戯志才は居るか？」

ガラリと音を立てて一人の老人が入室してくる、白い鬚を蓄えた仙人のような老人だ。

「此処に居ますが・・・何か用ですか？」

「うむ、お主に仕事を持ってきた、とある家で教「いやです、働きたくありません」・・・お主相変わらずじゃのう・・・」

老人にも差し出された竹管にも目をくれず写本し続ける戯志才、その手はよどみなく動き続けている。

「まったく・・・大学でも並ぶもの無しといわれた天才がこれではのう・・・」

「自分は何より働くことと儒学者が大嫌いですから」

「その反骨精神をもっと他に生かしていれば・・・」

「自分は生きていく最低限以外働きたくないでござる」

泣きを入れた老人に対しぼっさりと切り捨てる戯志才、彼は何より働くことと儒学者が大嫌いだと公言している。

儒学と言うのは儒教の教え、つまり孔子の教えでありこの時代の

世のルールであった。

儒学者は往々にして名士であり、名士は役人や武官などの人材を推挙することで名声を得る人達、簡単に言えば偉い人達のことである。

「お主もその儒学者嫌いさえなければ、今頃はこんな所で写本などせずとも役人でも学者でも好きなように生きていけたはずじゃろうに・・・」

じろりと睨む老人、しかし戯志才は涼しい顔で受け流す。

「まあそれは良い・・・しかし、この仕事は絶対に請けてもらうぞ」
「絶対に嫌です、大体教師なんて柄じゃありませんよ学長」

「曹騰様の依頼じゃ、受けぬと首が飛ぶぞ」

此処でようやく学長を見る戯志才、眉は寄り口はへの字であり顔一杯の不機嫌を表していた。

曹騰とは曹操の祖父であり、元宦官であり、皇帝の絶大な信頼を得て莫大な権力を誇っていた。

この時代、そんな人物の依頼を首を横に振れば首が物理的に飛ぶ。
「曹家なんて名家の依頼なら他に飛びつく輩が五万と居るでしょう」
曹家の家庭教師になるということは曹家と顔を繋ぐことになる、つまり名声を得ると言うことであるから名声が欲しい学者は飛びつくだろう。

「お主、曹家の娘・・・曹操を知って居るか？」

「生憎と世の噂については頓着しておりませんので」
学長がにやりと笑う。

「もう既にこの依頼に飛びついた学者が三人も論破されて潰されとる」

戯志才の顔がさらに渋くなる、家庭教師というならば相手は子供、子供に論破される学者など学者としての生命は終わったも同然なのだ。

そうなれば人間は悪知恵が働く、どうやら戯志才を曹操の生贄にしようと企んでいるらしい。

「お主の性格はともかく、頭の良さは折り紙付きじゃし何とかなるじやろう」

そういつて笑う学長とそれを睨む戯志才、これが三日前のことである。

そんなことを思い出しつつ曹家の門を叩き、要件を告げて侍女に通された部屋で待つ戯志才、しかめっ面で待っていると髑髏をモチーフにしたであろう髪飾りをつけた少女が部屋に入ってくる。

「貴方が新しい教師かしら？」

恐らくこの少女が曹操なのだろう、年齢に似合わぬ覇気と知性を感じるが、顔にニヤニヤと言った感じの笑みを貼り付けている。

「本日より教師としての依頼を受けました、名を戯志才と申します」

そう言いながら軽く頭を下げる戯志才、無位無官ほぼ無職の戯志才よりも曹家のご令嬢である曹操の方が世の中の的に上人間だろう。

「私は曹操 字は孟徳よ、貴方はあの戯志才で間違いないのね？」

「あのと申しますと？」

「8歳で孫子を読破し、10歳で大人と論を交わし、12にして学者を論破し、大学では口論で勝てるもの無しといわれた天才と聞いているわ」

実際に、戯志才はその通りの天才振りを発揮していた。

曹操はさらにニヤニヤと笑いながら話を続ける。

「それに孔融に対して儒学者なんて大嫌いだと口論して怒らせたほどの徹底した儒学者嫌いとしても聞いているわ」

戯志才の顔が歪む、両方とも心当たりがあると言うか実際にあったことである。

大学で戯志才は孔融に儒学者など大嫌いだと言って口論を吹っかけ、結果として怒った孔融との殴り合いになるほどの大喧嘩をしているのである。

孔融とは孔子の直系の子孫であり、この時代の儒学者の代表者であり、名士の元締め的な存在であった。

勿論そんなことすれば世の中の名士に嫌われる、世の偉い人たちから嫌われたのだからエリートコースであった大学を卒業しても干されてしまい、結果として写本などの日々生きていける程度の仕事しかないのであった。

本来なら闇討ちされようが暗殺されようが仕方ないほどの大事件なのだが、大学の学長が庇った事でギリギリ戯志才は生きているのである。

「ええ、補足しますと殴り合いで負けた事まで事実ですよ」

さらに戯志才の体力は10歳年下の子供と喧嘩して負けるほどの貧弱っぷりである。

「そんな方がどんな授業をしてくれるのか楽しみだわ」

曹操は一貫して笑みを崩さないが、戯志才はもう帰りたくなってきたのであった。

第一話 曹操に出会う（後書き）

戲志才は、三国志での知名度は皆無です。

具体的には「郭嘉伝」と「荀？伝」に数行出てくる程度であり、三国志演義では出番無し。

書かれている内容で目立ったことは【荀？を推挙した】と【死亡後に代理として郭嘉が荀？によって推挙された】という二つぐらい。

個人の特徴について書かれているのは、曹操に見所ありとして尊重されたらしいことと、交友関係が狭かったこと、どうやら曹操の最初期の軍師的なことをしていたことぐらい。

字・生年・没年・活躍も不明であり、よほどの三国志マニアでもない限り知らないと言われる程度の名です。

恋姫では郭嘉の偽名として有名ですが、「そんな判らん人なら好きにキャラ変更出来るぜヒヤッハー！」のノリで書いていこうと思います。

第二話 曹操と対話する（前書き）

個人の呼び方の優先順位は三国志要素と恋姫要素を合わせて
役職名＞字＞名＞真名

とさせて頂きます、右に行くほど親しいということ。

第二話 曹操と対話する

「では孟徳殿、今から質問を複数させていただきますがよろしいですか？」

「ええ、かまわないわ」

戲志才は無表情で筆と竹片を持ち、曹操はそれに笑顔で答えた。

「孟徳殿の年齢は？」

「女性に尋ねるものではないと思うけれど、数えて14になるわ」

曹操の目元がわずかに動いた、大して戲志才は口の端だけ笑いながら竹片に何かを書き込んでいく、どうやらわざとこんな質問をしたらしい。

他にも【通っている私塾の先生の名前を答えよ】【剣・馬・本・

装飾品・お金、この中で惹かれる物は？】【物取りを捕縛したが自分の恩人であった場合の対処は？】といった質問を続ける戲志才。

「これが最後になります、孫子の九變篇における将の五危を答えよ」

「必死・必生・忿速^{ふんそく}・廉白・愛民の五つ」

「その意味は？」

「思慮が欠ける者は殺され、勇氣に欠ける者は捕虜に、短気な者は計略に掛かり、名誉を重んじる者は罠に掛かる、兵士をいたわり過ぎる者は苦勞が耐えない、これらに当てはまる者は指揮官に向かない者と言う意味ね」

「ご名答」

戲志才の問いに淀みなく答える曹操、正直この質問に答えられると思っていなかった戲志才は内心で舌を巻いた。

「ちなみに孫子はどれほどお読みになりましたか？」

「そうね・・・暫く前にお爺様に貸して頂いた時に読んだぐらいね」

「・・・質問は以上です」

「採点の結果はどうかしら？」

戲志才の評価が気になるらしい曹操、それに対して戲志才は笑顔で次のような言葉を放った。

「そうですね・・・私の分析によりますと、孟徳殿には自分が必要ありません」

戲志才がそう言い放った瞬間、曹操の時間が止まった。

たつぷり十秒ほどだろうか、曹操が止まった時の彼方から帰還したときには戯志才は後片付けをしていた。

「……理由を聞いてもいいかしら？」

引きつった笑みを浮かべながら問う曹操、正直曹操には戯志才がなぜそういう結論に至ったかがさっぱり判らなかつた。

「孟徳殿には今の私塾の師で十分であり、その他の分はご自分で学習される分で十分でしょうから」

戯志才的には過程的にも結果的にも必要無さそうな仕事をするよりも、自分が本を読んだりする時間の方が貴重であるし、その方が双方のためだと思っていた。

客觀的に見て無駄な事はするべきではない。戯志才は合理的な人間だった。

「ああ、曹騰殿には私も論破されたと言っても言っておいてください」
たいした理由も無く依頼を断れば処刑されるのを防いでおくのも
忘れない、余り欲がない戯志才も生存欲はあるらしい。

「!?!? あはははははは!!」

戯志才の発言に曹操は驚いた後・・・爆笑した。腹を抱えながら目には涙が浮かぶほどの大爆笑である。

なんて馬鹿で面白い奴なんだろう！

子供に論破された学者という不名誉と、下手をすればお爺様に殺されるかもしれない危機を背負うというのに気にしていない。

そのまま家庭教師の依頼を受けていれば、お爺様とのコネや私に物を教えた学者としての地位と名誉を得られ、知者として名を馳せる好機だというのに！

いや、戲志才は逆に危機も不名誉も十分に得ている、それが多少追加されても構わないというのか？

単にそれに気が付かないほどに馬鹿なのか、それともそれに気が付いていても気にしないほど剛毅なのか・・・どちらにしろ面白い。このままではお爺様の依頼を体よく断られてしまい面白くない。先ほどの質問形式からして頭は柔軟であるし、知識も申し分ないだろう。

何よりこんな面白い奴を手放すなんてなんて勿体無い事なんだろう！

「気に入った！」

「・・・は？」

「戲志才、貴方をこの曹孟徳の勉強の師となって貰うわ！」

曹操はこんな面白い人物を手放したくなかったし、戲志才が家庭教師をすることは確定してしまったらしい。

逆に戲志才は鳩が豆鉄砲を食らったぐらいに面食らっていた、曹操なら同じような結論に至って自分には必要ないものと思っていたのである。

「いえ、ですから私は・・・」

今度は戲志才の時が止まっていた。

「今日は顔合わせだったから明日からお願いするわね」

ここぞとばかりに畳み掛ける曹操、戲志才はまだ混乱している。

「ああ、明日は私の従姉妹が来るから一緒に授業をお願いするわ、戲先生」

そう言い切って笑顔で消える曹操、一分後に現実に戻ってきた戲志才はいろいろな物を諦めた、もう既に戲志才を家庭教師にするための策を曹操は実行しているだろうし、今から持ち物を纏めて逃亡するにしていささか時間が足りない。

荷物を諦めれば逃亡は出来そうだが、曹操は確実に追いかけてくるだろう。

さらに曹操の従姉妹が追加されるらしい、戯志才は授業に曹操が二人いることを想像してしまい胃が痛くなるのを感じた。

とりあえず、前向きにこれからやることを考えて消化するしかないだろうと天を仰いだ。

「天よ、なぜ私にこんな苦難を与えるのでしょうか」

天は何も答えてはくれなかった。

第二話 曹操と対話する（後書き）

そういえば、戯志才の外見や年齢などの描写してない事に気が付いた今日この頃。

きつとそのうち出てくるはず・・・

第三話 戯志才の授業（前書き）

感想が2件も来ました、この場を持って返事とさせていただきます。
ありがとうございます、頑張らせていただきます。

第三話 戲志才の授業

「では本日の授業を始めますが、最初ですのでどのような授業が良いか意見を求めます」

ごほんと咳払いをして曹操と曹操の従姉妹である夏侯惇・夏侯淵の姉妹を眺める戲志才、それに対してきょとした表情を浮かべる三人。

実は部屋に入っただけですぐに曹操の従姉妹が二人だったことで思考が固まりかけたが、戲志才は何とかなる範囲だと思い直して復帰した。「あら、どのような授業でもいいのかしら？」

すぐに思い直して面白そうな笑みを浮かべるのは曹操、どんな物を出すかを考えているらしい。

「ふむ、どのような・・・ですか？」

戲志才の発言を噛み砕いて思案するのは夏侯淵、このような授業の形式は知らないのか多少戸惑っているようだ。

「武将だ！凄く強い武将が出る物がいい！」

自分の欲望に忠実だったのは夏侯惇、頭を動かすより英雄譚のよきな心踊る物が良いらしい。

「まずは武将が出るもの・・・他に案はありますか？」

資料をより分ける戲志才、この授業を想定していくつかの範囲の資料を持ってきてあったのであった。

「私は姉者の言う通りで良いが・・・授業なのだから学べるものが良い」

「そうね・・・なら私は私が聴いたことの無く、とても美しい物がいいわ」

授業だからと学ぶ姿勢を見せる夏侯淵と、無理難題を叩きつける曹操、曹操の笑みはそれはもう清々しい物であった。

「武将が出て学べ、尚且つ孟徳殿が知らずに美しい物・・・ふむ」
戲志才は幾つかの想定から条件を当てはめて削っていき、最後に

二つ残ったが美しさで勝る方を残した。

「では歴史上で最も美しい戦いをしたという戦術家ハンニバル・バルカの半生を授業にしましょう」

聞きなれない名前に疑問を浮かべる三人に対して、とっておきの本を持ち出した戯志才は笑顔を浮かべた。

「はんにばる・・・？聞きなれない名前ですが」

三人が疑問符を頭の上に浮かべる中、夏侯淵が手を上げながら疑問を上げた。

「漢より絹の道を通り遙か西方の羅馬国^{ローマ}、その羅馬と戦ったカルタゴ国の將軍ですよ」

簡略な地図を机に本を並べて描きながら場所を示す戯志才、カルタゴの場所はイタリア半島から地中海を真下に下った南アフリカ上部辺りになる。

「ハンニバルは当時最強の国である羅馬に対して、首都から西方に位置するアルプス山脈と呼ばれる険しい高山山脈地帯を、冬季に約四万の歩兵と約五千の騎兵、四十頭の戦象を連れて超えようとした」

「冬山を行軍なんて自殺行為ね・・・」

「ですがハンニバルは七日かけて山の頂に至り、十五日目には無事下山を終えました」

「「ええっ!？」」

曹操や夏侯淵の驚きも当然である。

冬の行軍は凍死の危険を抱え、冬山はそれに加えて雪崩・転落・食料調達の難しさと高難易度で、尚且つ超えるべきアルプス山脈はヨーロッパ最高峰の山脈なのだ。

これら全ての難易度が掛け算で行われ、さらに大軍で行軍すると通常なら壊滅どころか全滅の危険が盛大にあるのだが、ハンニバルは歩兵二万、象二十頭の犠牲があったとはいえ成し遂げている。

「アルプス越えで兵の信頼を得たハンニバルはその勢いのまま、羅

馬の首都の近郊都市に奇襲を仕掛け占領、羅馬の敵対部族や敵対都市を仲間に引き入れ兵を増強し、羅馬の近郊都市を次々に落としていきます」

羅馬は都市同士の連合であったのだが、首都以外の連合都市をガングラン倒しながら何年も首都付近に居座るハンニバル。

大きな会戦になればハンニバルの戦術によって自軍の犠牲少なく羅馬軍を壊滅させ、ならばと羅馬が持久戦術を取れば略奪によって食料を得るといふ悪循環を起こし、南イタリア半島はほぼハンニバルの占領状態となっていたのだ。

「そんな中でカンナエの戦いが起きました、羅馬は自軍の最大動員数の一割である約七万五千の歩兵と五千の騎兵を向けました」

もちろん羅馬軍はハンニバル以外のカルタゴ軍と戦っているし、海軍・陸軍共にかんりの数を動員していた。

都市防衛用の兵もあつたので搾り出せる全力の兵をぶつけたと思われる。

「迎え撃つハンニバルの軍は五万でそのうち一万は騎兵でした、両軍の配置はこうですね」

机の上に両軍の軍の陣形を碁石や駒を使って配置する戯志才、ローマ軍は正方形の重装歩兵の左右に騎兵を、ハンニバルは歩兵を2部隊に分けて二の字のような陣形の左右に騎兵をつけている。

「さて、皆さんはどうなると思いますか？」

ここで曹操たち三人に意見を求める戯志才、一番最初に手を上げたのは夏侯惇であつた。

「ハンニバルが真正面からぶつかって敵を粉碎する！」

数の差や戦術とかは特に関係なく主役が強いと主張する夏侯惇、その目に一切の疑いは無い。

「うーむ・・・こうして中央突破を図った？」

ハンニバル軍の歩兵の陣形を△の形に変えて敵軍に突撃させる夏侯淵、だが自分の考えを信じきれて居ないようだ。

「・・・無理ね、逃げたのかしら？」

兵数的に負けると踏んだ曹操、約1.5倍の兵量は覆せないと思っただけらしい。

各自の意見を見た戯志才は、ハンニバルがどうしたのかを再現し始めた。

「まずハンニバル軍の左騎兵が敵軍の右騎兵を圧倒し敗走させました、このあたりは騎兵の兵量が多かったので順当ですね」

羅馬軍の右側の騎兵を取り除く戯志才、ハンニバル軍の左の騎兵が自由になった。

「次に、前の歩兵では受けきれなかったので左右に逃がして後ろの部隊で正面を塞ぎました」

ハンニバル軍の前の歩兵部隊を左右に逃がし、凹の形にして羅馬軍を受ける陣形に変えた。

「そのまま羅馬軍の左の騎兵も敗走、そして・・・こうなります」

左右に分かれたハンニバル軍の前の歩兵部隊が伸びて行き、敵軍の後ろを騎兵が塞ぐと回の字のように敵軍を囲んだ。

「このようにハンニバルは騎兵の機動力を上手に使って相手を包囲殲滅することに成功しました」

これがハンニバルの最も美しい戦いと言われる包囲殲滅戦術である。

「・・・まるで魔法を見ているみたいね」

曹操が羅馬軍の将軍だったと思うと、背筋が寒くなるような見事な傭兵であった。

「・・・さて、今日はこの辺りにしましょうか」

パタンと本を閉じた戯志才は窓の外を見た、昼には始まったはずなのにそろそろ夕食の時間になる。

「満足いただけましたか？」

要点は抑えたつもりであったが、この場の三人が満足できない授業なら戯志才的に失敗である。

「はいっ！凄く面白かったです！」

「はい、とても勉強になる時間でした」

満足げに答える夏侯姉妹、この二人には十分楽しい授業であったらしい。

「とても素晴らしい時間だったわ、思わず時を忘れるほどにね」

大満足の様子の曹操を見て、戯志才は何とかなったようだと言胸を撫で下ろした。

「所で、この本は何処で入手されたのかしら？」

笑顔のまま素朴な疑問をぶつける曹操、羅馬のように遠い国の本を入手しにくく、手に入れても翻訳が大変だし、翻訳版なんて市販されてるわけが無い。

「知り合いの羅馬まで行くという商人から羅馬の文字の本を貰いまして、文字もその商人に習って写したものです」

「そう・・・他にそういった本は持っているの？」

「そうですね・・・羅馬ですと他に十本ほどありますが、異国の物となると翻訳したものが二十本ぐらいですね」

「・・・他の国もあるの？」

「ええ、羅馬語で翻訳した物なら数国分ありますよ」

「「えっ？」」

驚く曹操と夏侯淵、なんか今日は驚いてばかりである。

「うん？その何処が凄いのだ？」

そんな中、全くわかっていない様子で夏侯惇が首を傾げた。

「そうですね・・・皇帝陛下から名指しで勧誘されてもおかしくないほどよ」

どれほど異常な事態かため息ながらに説明する曹操、だがその目は妖しく輝き口元には笑みが張り付いている。

「出来たら私にもその本を読ませてくれないかしら？」

貴重な西方の書物を読めるという滅多にない機会が目の前に転がっているのだ、これを逃す手は無い。

「・・・できれば私にもお願いします」

曹操に続く夏侯淵、どうやら今回の話が面白かったので期待しているらしい。

「かまいませんが・・・ではこちらで良さそうな本を見繕っておきます」

そしてそんな貴重な本をあっさりと貸す約束をする戯志才、この男は何か重要な物がはづれている。

「むう・・・」

そんな中、夏侯惇はジッと不機嫌そうな顔で戯志才を睨みつけていた。

親愛なる華琳様と最愛の妹である秋蘭は、なぜこのようなひ弱そうな男に頼みごとなどしているのだ！

もしかしたら私には考え付かない何かがあるのかもしれないが、なにかこう・・・もやもやといやな感じがする！

夏侯惇は射抜くような眼差しを戯志才へと向け、その真意を見抜こうと試みた。

対して戯志才は、夏侯惇の内心を知ってか知らぬか彼女に話題を振った。

「元議殿げんぎようはどうしますか？他の西方の武将の本もありますが」

「ううむ・・・読んでみたいが・・・」

急に話題を振られ驚くと同時に、西方の武に思いを馳せていたが、すぐに頭を振るとキッと戯志才を睨み直した。

おのれ！

私が怪しんでいると見て懐柔に來たな！

華琳様は買っているようだがこの男は油断ならない、この夏侯惇元讓が見極めて叩き切ってやる！

そんな夏侯惇の決心とは他所に、戲志才は何を貸すべきなのか脳内目次のピックアップを始めていたのであった。

第三話 戯志才の授業（後書き）

書いてる最中にありのままに起こったことを言うぜ

俺は恋姫を書いていたらしいの間にかハンニバルを書いていた
なにを（r y

と言う感じでした。

意外と早く書けたので早めだけど投稿して置きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3805x/>

真・恋姫†無双 戯志才伝的なもの

2011年11月16日03時22分発行